

# 「蛇ぬけの碑」の教訓

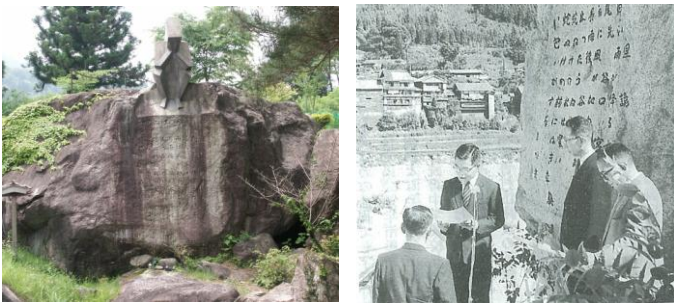
前 (株) 建設技術研究所 ○中矢弘明  
現 NPO法人 砂防広報センター  
神稲建設木曾支店 杉原良弘  
木曾あすなる荘 片田 恵  
(株) 建設技術研究所 池上浩二

## 1. はじめに

長野県木曾郡南木曾町の木曾川右岸、伊勢小屋沢に「蛇ぬけの碑」がある。

この碑は、1953 (昭和 28) 年 7 月 20 日に発生した「蛇ぬけ (土石流)」の死者、行方不明者の慰霊と、悲惨な災害を 2 度と起こさないことを願い、7 回忌に当たる 1960 (昭和 35) 年に建設された。

土石流によって流出してきた大岩に、この地方の言葉である「蛇ぬけ」に関する俚諺 (りげん・地方の言い伝え) が書かれている。碑の頂上には、「悲しめる乙女の像」が安置されている (笹村草家人元東京藝術大学助教授作)。文献及び現地調査を行ったので報告することとした。



蛇ぬけの碑	
い匂いがする	蛇ぬけの前はきな臭
蛇ぬけの水は黒い	止まったらぬける
長雨後 谷の水が急に	雨に風が加わると危ない
尾先 谷口 宮の前	白い雨が降るとぬける
里諺	
美明書	

図1 碑の現在、竣工式、碑文

## 2. 碑文の解釈

### ○「白い雨が降るとぬける」

気象庁のホームページ「風と雨の表」には、「1 時間当たりの雨量が 50 mm 以上になると、しぶきであたり一面が白っぽくなり、視界が悪くなる。」と解説されている。この地方ではこのような状況になると「蛇ぬけ」が発生する可能性があることを示唆している。

この災害の場合、木曾地方は、6 月上旬より本格的な梅雨に入り、1 日当たり 30 mm、多いときには 100 mm 程度の雨の

日が続いていた。7 月 20 日は、明け方から次第に降雨が強くなり、7 時～8 時には、1 時間の雨量が 70 mm を超える豪雨となった。1 日の雨量は 235 mm、土石流の発生は、7 時 52 分頃である。

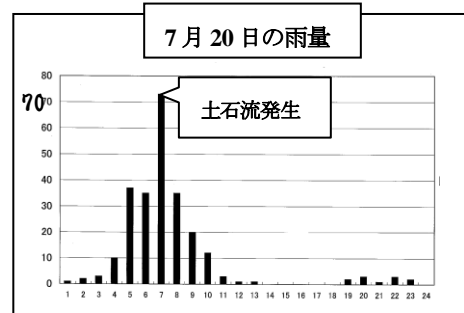


図2 読書発電所の雨量 (南木曾「創刊号」から復元)

### ○「尾先 谷口 宮の前」

尾根の先端、谷の出口、お宮の前には家を建てるな。この災害は「谷の出口」で起こっている。

### ○「雨に風が加わると危ない」

風によって木の根がゆるみ、流木の発生が促進されることがある。この災害では、毎秒 12 メートルの南の風が吹いていた。

### ○「長雨後 谷の水が急に止まったらぬける」

溪流の流木や崩壊等によって、上流部で一時的な「せき止め」が起こり、下流部では水位が低下することがある。この災害の場合、中学校の生徒の証言で、「友達と一緒に、伊勢小屋沢の土橋の所へさしかかった。その時の水の流れは、今までこんなに増えたことは見たことはないと思われたほどで、もうあと 50 センチもしたら、この土橋が流れてしまうと思った」とのことである。

災害発生直前に同じ場所を通った、当時の教務主任である蜂谷教諭への最近のヒアリングによれば、「学校へ行く途中、(7 時 50 分頃)伊勢小屋沢の土橋付近の水量は、少ないように思った」との証言がある。

### ○「蛇ぬけの水は黒い 蛇ぬけの前はきな臭い匂いがする」

登校途中の中学生の証言がある。「水の色はドス黒く、ドロのような臭いがプーンと鼻をついて、何とも言い表せない恐ろしさを感じた。それで、僕は思わず「こんなに水が増えたから、抜けてこなければ良いがなー」と友

達に言うと、友達も、「そうだなー」と言った。」

### 3. 伊勢小屋沢の位置及び流域概要

伊勢小屋沢は長野県南木曾町にある木曾川右支川である。流域面積は、約1.49平方キロメートル、流路延長約2.7キロメートル、平均溪床勾配5分の1の急峻な溪流である。流域の地質は花崗岩である。

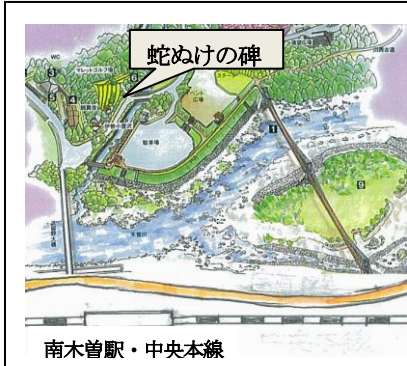


図2 位置図

### 4. 被災状況と救助活動 (参考文献の言葉を引用)

昭和28年7月20日、午前7時52分ごろ、豪雨の中を無気味な振動と音響のうちに土石流は伊勢小屋沢を流下し、一瞬のうちに読書中学校に襲いかかった。

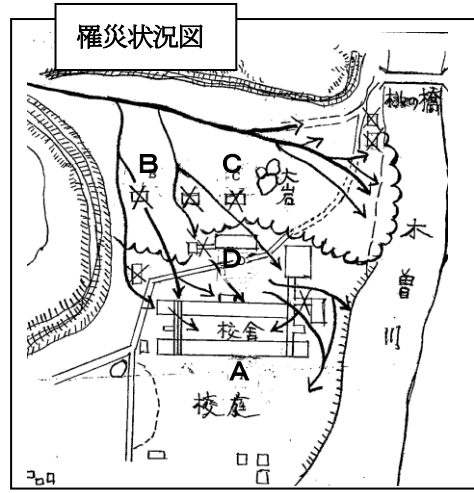
学校の前庭は、たちまち、流木と泥と岩によって埋め尽くされた。講堂への渡り廊下は圧倒され木曾川へ押し出され悲惨な状態になった。一方、この山津波は読書中学校の北側の伊勢小屋沢に最も近い、太田美明校長の住宅等、家屋5軒を瞬時に呑み込んだ。

家は崩壊、四散し、犠牲者として栩秋教諭夫人、校長の長女明子(3才)、長男晴之(1才)の3名(幼子2名は行方不明のため死亡認定)の死者、栩秋教諭と校長夫人の2名が重傷を負うに至った。

この際、太田校長が押し寄せる土石流の中に毅然と立ち、家族の犠牲をもちえりみず、全校生徒の避難と救出のため先生や生徒を指揮した。その姿に、全員の勇気はふるい起こされ、志気は高まり、避難及び救助作業が迅速、適切に行われ、200名以上の生徒全員が無事、安全地帯に避難することが出来た。



図3 被災直後の全景、被災概況



A 読書中学校 B 太田校長宅 C 栩秋教諭宅 D 福沢桃介亭

図4 罹災状況

### 5. おわりに

「碑」は、太田美明校長の高潔な人格、災害発生時の俊敏な行動、指揮、悲惨な家族の罹災、地域の人々の土砂災害に対する危機意識等が動機となり建設された。

現在、土砂災害の跡地は、公園に整備されており、このような対策が最も望ましいと考えられる。

災害地内にある、大正8年に建設された「福沢桃介亭」は現在資料館となっているが、鉄筋コンクリート支柱の上に建てられた建築物(ピロティー方式)であったため、他の建物に比較して被害が少なかったことも注目に値する事実である。

伊勢小屋沢流域は、被災後50年を経過し、砂防堰堤の建設等のハード対策は実施されているが充分ではない。平成21年3月、「土砂災害警戒区域」に指定されている。流域は花崗岩地帯であり、風化も進行しつつある。

「白い雨が降るとぬける、谷の水が急に止ったらぬける」と俚諺(碑文は里諺)にあるが、雨量強度や水位変動を的確に現地で把握し、「迅速な避難に活かすことが出来ないか」の検討も望まれるところである。

「災害は忘れた頃に起こる」と言われる。「碑」に込められた教訓が、この地域に風化することなく末永く伝えられることを願ってやまない。さらに、全国の地方、地方にある災害に関する「言い伝え」、「諺」を、その地域の住民に周知することが、「尊い人命や財産を守ること」に有効ではないかと考えている。

#### 「参考文献」

1. 土石流災害：池谷浩著(岩波新書)
2. 南木曾 創刊號(読書中学校交友會)：(昭和29年3月15日発行)
3. じゃぬけー伊勢小屋沢その後の45年(平成3年1月南木曾町編)